天心無頼

昭和五十六年一月十一日印刷
昭和五十六年一月十五日発行

天心無頼

著者　春日一幸

発行所　民中連（民社中小企業政治連合）
東京都千代田区永田町二―九―六
十全ビル二〇一号室

印刷・製本／廣済堂印刷

天心無頼

第二卷

序にかえて　自叙

はじめにその想いが、ちぎれ雲のようにふんわりと、こころのどこかに浮かび上がるのである。

それは自分のいのちの辺りから湧き出たものか、何処か遠いところから吹き流されてきたものか、その想いの起源はさだかではない。

でも、その淡い浮き雲のような想いは、みる間に私のこころにくろぐろと拡がって、知らず私をすっぽりと覆い包んでしまうのであった。

そしてその想いは、あたかも雲が固まって雨になるように、間もなく切ない願望となって凝結し、私に激しい勢いで降り注ぐのであった。

かくて、私はその願望の雨に打たれてずぶぬれになる。その願望のしずくが私の体内のすみずみに滲みわたる。そしてふと気付いた時には、もはや私はその願望そのものに成り切っているのであっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

私は願望にせかれて歩き出す。もう、わきめを振る余裕などありようもない、それはまっしぐらな足どりであった。

最初の浮き雲が浮かんだのは、通信講習所高等科、十七、八歳の少年の頃、島田清次郎の「地上三部曲」や、林芙美子の「蒼馬を見たり」の詩集などが、私の早春の青空にかげりを見せた時である。

そしていつしか私は、そのにおいを嗅がないでは、一時も生きられぬ文学の虫のごときものに成りきってしまった。

読んだり、書いたり、この文学書生はその後悶々苦渋の数年をこの道に没頭することになったものである。

二十五歳の年、思いもかけずこの生活に転機が訪れた。

つたない私の英語が銭の価値を生むことになったのである。

その頃私は名古屋の義兄宅の居候であった。

昭和十年、それはわが国貿易ルネッサンスの初期である。当時、日本の業者には英語を話せる者が

少なく、そこで私が外人バイヤーとの商談の通訳を、あちらこちらから頼まれることになった。

そしてこの暮しを半年程つづけている間に、そのバイヤーの一人、印度人バンシー・メーター氏の知遇をえて自分で輸出商を開業することになってしまった。

電信局時代の欧文タイプと文学書生の頃の英文学の苦吟が、ここで妙に絡んで役立ち、私は地球の端々までも情熱をもやして、サーキュラーをじゃんじゃんと飛ばしたものである。

かくて、その後十年、私はこの事業活動に、一心不乱に精励した。

次の転機はあの大戦の終局の年にやってきた。

当時、私の事業は次第にかっぷくを整えて、折柄の経済混乱の波浪も乗りこなして社稷(しょく)は概ね固まっていた。

しかし、私はもはや商売に対する情熱を失っていた。敗戦の廃墟に立って、もう銭もうけなどしている時ではないと一途に思いつめてしまったのである。

終戦の年の秋、名古屋鶴舞公園の音楽堂で開かれた戦災市民大会が、私の政界に踏みこんだ第一歩、そして日本社会党の結成に参加した。

その間、事業は従業員に一托して、爾来、政治活動一筋にもう三十五年の年歴を積んでいる。

◎　当初、私は社会党における左派に属し、五月会のメンバーであった。
それは米軍占領下にあっては、左派の理論でなければ日本民族の独立は達成しがたいと思ったからである。
◎　昭和二十六年、私はその左派に訣別して右派に加盟した。
その理由は左派が桑港平和条約に反対したからである。この条約で日本はまず独立できるのに、それが反対だということでは、私は納得できなかったからである。
◎　そして昭和三十四年の秋、その社会党を見限って新党民社党に踏み切った。
それは社会党の中で、この先ともに貴いエネルギーを党内派閥の争いに浪費して暮すことは、もはや愚の骨頂であると諦観したからである。
◎　そのような経過を辿って私は今、野党勢力の統一をめざして全力をつくす思いにある。
政権担当能力を持つ野党の存在なくしては、議会政治は空洞、民主主義は虚像に過ぎないと思われるからである。

何はともあれ、よかれあしかれ、私はこのようにいのち一杯に、思うが儘に、信じた通りに生きて

きた。そして今もなお、その想いがふんわりと心のどこかに浮かびあがると、それがいつしか私の動かぬ願望となって、激しく私を駆り立てるのである。

七十年の越し路をかえりみて、私が今こころに描くものは、それは、行く雲流れる水のようなおだやかな、すなおな境涯である。

でも乱気流に揉まれて流れる黒雲のような、そして岩石に嚙まれてしぶきを散らす激流のような、そのような荒々しい行雲流水もまた尊く風情のあるものに懐かしまれてならないのである。

わが生涯の遍路、概ねかくのごとし。

啾々、一管の竹洞に想念を托して、この煩悩の虚無僧は、なおも天心無頼の旅をつづけているのである。

著　者

目

次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序にかえて　自叙

私の履歴書

生い立ち　17
初　恋　20
進　学　24
青雲の頃　28
大仏開眼　32
青春万華鏡　36
廻り角　40
ホーホケキョの唄　44
無銭行脚　48
絹張りのかさ　53

沈　湎　57
自殺行　61
満天の星の下で　66
蘇る　70
実業の世界　74
召集令　78
灰　燼　82
うぐいすの初音　87
一念発起　91
大衆と共に　97
不屈　101
国会へ　106
裂　帛　111
民社党結成へ　116

転落と蘇生と　130
初心変えるべからず　126
委員長就任　120

随想篇

母への手紙　177
わがはたちの月光の曲　173
青春万華鏡の頃　162
じゃんのたのしみ　159
すしに想う　157
娑婆の味放談　153
俺が浮世のみちしるべ　147
君は太陽の王子　137

牛飲馬食の養生訓 180
恋愛至上主義で無病息災 183
交遊のことあれこれ 186
私も竜馬が好きである 189
灰皿事件とそのあと 193
私が見たクレムリン 199
スエーデンから故国へ 204
アイヒマン裁判傍見記 209
日中友好の旅のプロローグ 220
随想　中国散見 226

詩　篇

その一、文学書生の頃 237

その二、外地散見　301
その三、外交についてあれこれ　287
その四、国権の岸辺を洗う　273
その五、性根のうた　257

経　文

意訳現代版　仏説父母恩重経　319
大日大聖不動明王讃偈　329

私の履歴書

（一九七二年三月、日本経済新聞連載）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com